SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.06

2018.03

「空飛ぶヨット」で大海原へ

Take Free

「空飛ぶヨット」で大海原へ

インタビュアー：片山清宏
文・片山久美

カップルや家族連れの観光客で賑わう3月の休日の江の島。土産物店や飲食店が軒を連ね、まっすぐ歩けないほどの混みようだ。しかし、一歩江の島ヨットハーバーに入ると、そこには先ほどまでの観光地とは違う、ストイックなスポーツマンの世界が広がっていた。

真っ黒に日焼けした精悍な顔立ち。1日の練習を終え、マストをたたむ人々のなかに、彼はいた。

川田貴章。

2020年東京オリンピック金メダルを目指すセーリング選手である。川田は「東大医学部卒」というもう一つの肩書きも合わせ持ち、いまセーリング業界のみならず日本中から大きな注目を浴びている。

オリンピックに向けて今まさに大海原に飛び出そうとしているトップセーラー川田の心境に迫った。

「陰キャラ」だった小学生時代

1983年、横浜市で川田は生まれた。海と川田との出会いは早かった。

「父は横浜市立大学医学部のヨット部出身でした。父が医者になってから買ったクルーザーに、赤ん坊の私を乗せてくれました。初めて乗った記憶はもちろんないですが（笑）」

小学校は横浜市の名門・私立精華小学校へ。入学後も年に数回、父はクルーザーに乗せてくれた。
「怖いという気持ちはまったくありませんでした。船酔いもしませんでしたし、とにかく気持ちよかった。船の先端で寝転がっているのが好きで。船の上で釣りをして、釣った魚を食べさせてもらったりしました」
小学校の頃の川田は、どちらかというと「ボーっとした子」だった。インドア派で「陰キャラ」。スポーツはそんなに好きではなかった。
「ボールを使うスポーツが苦手。部活も家庭科部とか生物部とか。勉強はできるけどテストができるだけで、これといってやりたいことがない、『自分がない』タイプの子だったと思います」
初めてヨットに乗ったのは小学校3年生の時。「横浜市民ハーバージュニアヨットクラブ」で、OP（オプティミスト）級という全長2.31m、全幅1.13mの一人乗りの小さなヨットに乗った。きっかけは、母のすすめだった。

「ヨットとの出会いは、『いろんなことを体験させたい』と母が始めさせたいくつかの習いごとの一つでした。当時はたくさん習い事をしていて、学校が終わった後の一週間のスケジュールは英語、英語、体操、水泳、ヨットという感じ（笑）。それがいつしかヨットにはまっていったんです」
将来は医者になってほしい、しっかり勉強もさせたいという父の方針もあり、自主性を重んじる自由な校風に惹かれて超難関校である麻布中学を受験。見事合格した。
「毎朝6時に起こされて、母が前の晩に作った問題を解いてから学校に行っていました。おかげで中学受験は苦労しませんでした」

ヨットにのめり込み、全日本選手権優勝

中学入学後は、ヨットがどんどん面白くなった。
「休日はヨットに行き、平日は学校が終わると早く帰って筋トレをしたりと毎日がヨット漬けでした。練習場所は工業地帯の入り組んだところで、タンカーが出入りするので日曜日しか使えず、土曜日は江の島まで連れて行ってもらったりと結構大変でした」
15歳までの子供向けのヨットであるOP卒業後は、高校のヨット部に入るか、地域のヨットクラブに行くかの選択を迫られる。川田の通う麻布高校にはヨット部がなかったが、地域のヨットクラブに通うことにはためらいがあった。

梶本選手とのプリクラ（高校時代）

「中学校まで入っていた地域のヨットクラブでは、しっかりした知識に基づいたコーチングがされていないと感じていました。もっと世界レベルでの高度な専門知識を得たいという思いがあり、高校に入ってからはクラブに所属せず、海外の英語のヨットの書籍を取り寄せ、独学で勉強しました。海上練習だけは江の島のヨットクラブに入らせてもらっていました」
その戦略が功を奏し、全日本選手権、国体など高校3年生で出場したシーホッパーSRのレース全てで優勝。最高の形で高校でのヨット生活を終えることができた。
しかし、気づけば高3の秋。川田にも「大学受験」という難問が降りかかっていた。
「国体が終わるまでは本当にヨットのことしか考えていませんでした。全日本に優勝した頃からオリンピックを目指したいという思いが芽生えてきました。でも、今までお世話になったコーチに進路について相談したら、『ヨットで大学に行くのは辞めておけ』と言われて、そんなものかなと。3ヶ月後の1月にセンター試験っていうのがあるらしいから、とりあえず受けてみるかみたいな感じでした（笑）。当時は何学部を受けるかもまだ決まっていませんでした」

東大医学部進学とヨットの両立

ヨットでオリンピック出場を目指したいという息子の思いを知った父が出したアドバイスは、医学部への進学だった。
「医者の世界は大変だけど、世の中の役に立てる。一度資格を取れば経済的にも時間的にも自由な面があるし、自分のやりたいことにチャレンジしやすくなる、と言われました」
うまく父に乗せられたのかもしれないと思いつつ、父のアドバイスを信じて医学部を受験する。しかし、現役では全滅。
ヨットをやりすぎて受験に失敗したからと浪人時代は大好きなヨットを封印した。毎月愛読していたヨット雑誌も我慢し、試験勉強に打ち込んだ。

もともと英語や国語が得意な「文系男子」の川田だったが、ヨットで培ってきた持久力と集中力を発揮し、1年後、東大理Ⅲへ合格した。父も息子の東大合格、医者への道をとても喜んだ。

勉強とヨットの両立は中学から続けて来たこともあり、大学進学後もヨットは続け、「470クラス」という国内で最もレース活動が盛んな2人乗りのレーシング・ディンギーを始めた。

医学部では実習もあり多忙な生活だったが、オリンピック出場の夢は捨てずハードな練習をこなした。そして、大学4年生で1年間休学し、2008年の北京五輪に向けた国内選考に挑んだ。

しかし、オリンピック代選考で敗退。最終選考である世界選手権への3つの出場枠をかけた国内選考で、上位3チームに残れなかった。

当時のことを川田はこう振り返る。

「休学し、全てをヨットに捧げた1年間でした。一生懸命やった上での敗北。生まれて初めてどうすれば勝てるのかが分からなくなりました」

スポンサーや専属コーチもなく、両親からの資金を頼りにヨーロッパにも遠征する生活に限界が来ていた。

「もうダメなのではないか」。

そう感じた川田は、ヨットの第一線から身を引く決意をした。

現役引退、そして地域医療の現場へ

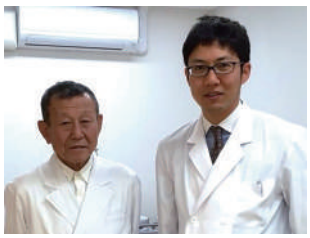
引退後は、今までお世話になったヨットに恩返しがしたいと、日本セーリング連盟A級審判の資格を取得した。

「学業一筋という生活はしたことがなかったので、学業をやりつつ、ヨット以外の何かをやろうと思いいろんなスポーツにチャンレジしました。ウィンドサーフィン、サーフィン、スノボー、剣術・・・。でも、どれも満たされず、ヨットの代わりになりませんでした」

「審判としてヨットレースに参加すると、選手として出場したい気持ちしか出なかった。乗っている選手が羨ましかった。綺麗に足を洗ってお世話になったヨットに恩返ししたいという気持ちだったのに、やっぱりやりたいという気持ちがあふれて来たんです」

大学卒業後は研修医として仕事もひと一倍熱心に取り組んでいた。

2008年9月に医師不足等による経営悪化のため銚子市立総合病院が突然休院。その受け皿として患者が急増していた国保旭中央病院への勤務をあえて希望し、現場で日々訪れる患者一人ひとりと向き合った。



研修医テストも全国5位という高成績を取得。NHKの人気テレビ番組「総合診療医ドクターG」にも出演した。後輩研修医として出会った女性と結婚し、公私ともに忙しいが充実した生活が始まった。

それでも、ヨットへの夢は捨てられなかった。

「医師としての自分は求められているし、人の役に立てているという実感もやりがいもありました。でも、目の前で患者さんの死を目の当たりにしてする日々に、いつか自分にも訪れる死を意識するようになりました。年齢を考えると、次のオリンピックが現役選手として活動できる最後のチャンスで、これを逃したら、死ぬとき後悔するんじゃないか、本当にこのままでいいのかなと、自問自答を繰り返していました」

一度きりの人生、後悔せずに生きたい

働き始めて3年、悶々としている川田の姿を見て妻である敦美さんが背中を押してくれた。川田は勤務していた病院を辞め、オリンピックに再挑戦する決意を固める。

「両親も含め、麻布中学・高校も自主性を重んじる教育方針だったこともあり、病院長や教授を目指すような出世コースに乗ること自体にこだわりはありませんでした。ただ、医療そのものは重要な仕事だと思っているし、既に医者としての自分と、それを前提に構築された環境・周囲の人たちとの関係ができていたので、そこを断ち切ることは勇気のいる決断でした」

父にはあらかじめ相談せず、退職を決意してから報告した。驚いてはいたが応援してくれた。

そんななか、2020年の東京オリンピックのセーリング競技が、自分がずっと練習してきた江の島で開催されるということが決まった。川田に追い風が吹き始めた。

そして今———

川田はナクラ17級という2016年リオオリンピックから採用された男女混合種目に挑んでいる。

ペアは子供の頃からの幼なじみである梶本和歌子選手。福岡第一高校でインターハイ・国体・全日本選手権優勝、第一経済大学で全日本学生ヨット選手権優勝、2012年ロンドン五輪代表、ワールドランキング1位、モス級（一人乗り水中翼ヨット）の2016年世界選手権女子優勝など、輝かしい戦歴を誇るトップセーラーである。

ナクラ17級は、大きく身を乗り出してバランスを取り、帆を操作する「クルー」、舵取りをする「スキッパー」が連携し

ながら時速50キロという速さで海を走る。海面から浮き上がるため「空飛ぶヨット」と称される。

川田がクルー、梶本がスキッパーを担当することになった。

出展：麻布流儀

2016年の冬に、江の島でやっていたナクラの合宿に2人とも参加していたんですが、その時に居酒屋でペアでやらないかとお互いに持ちかけました。オリンピックを目指すということは精神的にもとてもきついので、途中で挫折して諦められることが一番困る。技術よりもむしろ、高いモチベーションで一緒に目標を目指すことができるペアであることが必要なんです。彼女となら上を目指せる、勝てる、と思いました」

事実、梶本選手とペアを組んで3ヶ月後に念願のミキハウスとのスポンサー契約も結ぶことができた。

最強のペアと全力で取り組める環境を得た川田。現在は猛練習の日々。朝9時にヨットハーバーに行って、ヨットを整備して10時半くらいから出航。3〜4時間走って、片付けて、機材の整備。終わるのは午後5〜6時くらいになる。スペイン人の専門コーチのもとで筋力トレーニングはもちろん、日本ではまだ導入されていない技術的指導も受けている。

未来のセーラーへ伝えたい

川田は、東大医学部卒のセーリング選手として注目されることをどのように感じているのか。

「正直、最初は嫌でした。でも、ペアを結成してまだ3、4ヶ月なのにメディアにも注目していただけているのは、その肩書きのおかげもあるのかなと。ヨット業界の発展に貢献していけるのであれば、ありがたいことです」

川田には、2年後の東京オリンピックだけでなく、その先のセーリングの未来も見据えた思いがある。

インタビューの最後に次世代へのメッセージを語ってくれた。

「オリンピック競技としてナクラを選んだこと自体が次の世代を考えてのことなんです。世界の流れとして470が下火になりつつある今、まだ日本では注目されていないナクラを梶本選手と2人で学び、見せていくことで、若い選手が『おもしろい』『やりたい』と思ってくれることを願っています」

「世界レベルで戦うための取り組み方も伝えていきたい。例えば、外国人コーチを付けるために障壁となる言語の壁を取り払うためには、英語を学んでおくことが必須。資金集めも大切。東京オリンピックをチャンスにして、スポンサー企業にもっと貢献できるようにするにはどうすれば良いか考えることが必要です。これからの世代のセーリングは、湘南ベルマーレのように総合型地域スポーツクラブになって、地域で愛されるようになっていければ良いと思っています」

出展：麻布流儀

インタビューに同席してくれた梶本選手もこう語る。

「セーリングは高校に入ると辞めちゃう子が大半なんですが、実はセーリングは生涯スポーツ。イギリスでは70歳代くらいのおじいちゃんおばあちゃんが夫婦でセーリングを楽しんでいます。東京オリンピックで競技会場となる江の島は、ジュニアの子も多い。私たちが競技している姿をまず見てもらって、セーリングを身近に感じてもらいたいです。そして、子どもたちに『セーリングを続けたい、一生楽しみたい』と思ってもらうきっかけになればいいですね。そのためにも東京オリンピックに向けてがんばりたいです」

まずは2年後。「空飛ぶヨット」に乗り、江の島の海を駆け巡る2人の姿が目に浮かぶ。みんなの夢を乗せて、2人は今日も大海原に飛び出していく。

3月3日（土）海岸美化団体等交流会に参加しました！

3月3日（土）藤沢土木事務所汐見台庁舎にて開催された公益財団法人かながわ海岸美化財団主催の「平成29年度海岸美化団体等交流会」に参加しました。参加者74団体（約120人）で大盛況の交流会となりました。

最初の講演者は、2010年千葉国体セーリング競技成年女子SS級優勝者である庄崎賀絵氏。「セーリング競技とその魅力」と題して、2020年東京オリンピックセーリング競技の江の島開催に向けて、セーリングの仕組みからワールドシリーズまで、ヨットの魅力について動画を交えて分かりやすく解説してくださいました。

その後、ボランティア活動10団体と協賛企業15団体に感謝状が授与され、そのうちボランティア2団体と協賛企業1社が挨拶を行いました。そして、恒例のボランティア団体活動発表では、「湘南クリーンエイド倶楽部」代表の五十嵐実氏から「調べるゴミ拾い」と「神奈川海岸150kmビーチクリーン駅伝」の報告。2050年には魚よりもゴミの方が多くなっているという発表には、大きな反響がありました。

最後は懇親会が行われ、各団体との親睦を深めることができました。ありがとうございました。

（文・小林秀光）

NPO法人湘南バリアフリーツアーセンター＆
次世代型電動車いすWHILLお披露目会

鎌倉には海も山も寺社仏閣もあり、毎年たくさんの観光客が訪れます。しかし一方で、急な坂道や段差が多く、観光客で混雑することから、障がい者にとっては訪れにくい場所の一つとなっています。でも、そんなのってなんだか悲しくないですか？

NPO法人湘南バリアフリーツアーセンターは「障害があってもやりたい事を諦めなくて良い環境づくりをしたい」という思いで2016年に発足しました。現在、障がい者の方が観光しやすいように、案内窓口や店舗、観光施設、トイレの調査などを実施しています。今回のシンポジウムは「鎌倉の新しい観光の在り方」について考える機会としたいと思います。是非ご参加ください！

【主催】NPO法人湘南バリアフリーツアーセンター
【日時】4月28日（土）14時～15時30分
【場所】鎌倉婦人子供会館ホール（鎌倉市小町1丁目11-5）
【スケジュール】

14:00　開会

第一部
14:05～14:30　湘南バリアフリーツアーセンター 活動報告

第二部
14:30～14:40　WHILLの発表
14:40～15:10　WHILL×湘南バリアフリーツアーセンター対談
「鎌倉でのWHILL活用の可能性」
15:10　閉会
15:10～16:00　WHILL試乗会

【参加費】無料
【お申し込み】要予約（メールまたは電話）
メール：a-matsumoto@bf-shonan.jp
電話：0467-67-5372

湘南バリアフリーツアーセンターでは会員を募集しています。ご関心がある方はご連絡ください。

（文・松本彩）

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

湘南台のヨガスタジオ「みんなdeよが」

✓ヨガマットレンタル無料で気軽にはじめやすい!
✓ 来られる時だけ予約をして、自分のペースで通える!
✓続けやすいレッスン料!
✓ 初心者・男性も大歓迎!

深くおだやかな呼吸とゆったりとしたポーズを組み合わせて行うハタヨガをベースに、「朝ヨガ」と「骨盤調整」をテーマにした２つのクラスを開催しています。運動量やヨガをすることで得たい目的に合わせてクラスをお選びいただけます。

どちらのクラスもやさしいポーズで動いていきますので、ヨガが初めての方・体が硬い方という方でも安心してご参加ください。水曜日と日曜日の午前中に開催しています。

1日の始まりをスッキリ・気持ち良く過ごしてみませんか？

みんなdeよが

【住所】藤沢市湘南台5-2-11創建ビル3Ｆ
【最寄り駅】小田急江ノ島線「湘南台駅」徒歩2分
【ご予約・お問い合わせ】『みんなdeよが』で検索!

レッスンスケジュールはＷＥＢよりご確認ください。
ＨＰ：http://minnadeyoga.jp
Mail：info@minnadeyoga.jp

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.06
2018.03

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：小林秀光　松本彩
片山久美
COVER PHOTO：

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org

SHONAN VISION vol.06 | 2018年3月号 2018年3月25日発行 発行：NPO法人湘南ビジョン研究所 〒251−0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3−9−29 shonan-vision.org